

Title	書評：野上元著『戦争体験の社会学：「兵士」という文体』
Sub Title	
Author	塚田, 修一(Tsukada, Shuichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.64 (2007. ) ,p.139- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000064-0139">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000064-0139</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書評：野上元著『戦争体験の社会学——「兵士」という文体』

塚 田 修 一\*  
Shuichi Tsukada

♪戦争が終って 僕等は生まれた 戦争を知らずに 僕等は育った おとなになって 歩きはじめる  
平和の歌を くちずさみながら 僕等の名前を 覚えてほしい 戦争を知らない子供たちさ  
——ジローズ『戦争を知らない子供たち』（一九七〇年）  
恥ずかしながら、帰って参りました ——横井庄一（一九七二年）

### はじめに

一九九〇年代に、「戦争」研究のモードが明らかに変化した。これは大方の研究者が認めるところであろう。より具体的に言うと、「戦争がいかに語られてきたのか」=「戦争の語り」とか、「戦争はどのように認識されてきたのか」=「戦争認識」、さらには〈記憶〉という観点に立った研究といった、新たな戦争研究のモードが浮上・席卷してきたのである<sup>1)</sup>。そのような中で、富山一郎『戦場の記憶』（日本経済評論社、1995）や、占領期から一九九〇年代までの日本人の「戦争観」の変容を追った吉田裕『日本人の戦争観』（岩波書店、1995）、また、著名な戦争文学の「語り」を批判的に検証した、川村湊ほか『戦争はどのように語られてきたか』（朝日新聞社、1999）、さらに、戦争体験の世代差に着目し、戦後思想の変容と共に戦争認識の変容をも描き出してみせた小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』（新曜社、2002）といった優れた研究が積み重ねられてきた。

本稿で扱う『戦争体験の社会学——「兵士」という文体』も、「戦争体験がどのように書き残されたのか」を追尾しているという点で、その基本的な立ち位置を、上記の一九九〇年代からの「戦争」研究の転回/展開の延長線上に、ひとまずは位置付けることが出来そうである。しかしながら本書はそれらの先行研究とは似て非なる、新しい研究の地平を開くものである。

### 構成と内容

具体的な評価に入る前に、本書の構成と内容をみていこう。

本書の構成は以下のようになっている。

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻修士課程（歴史社会学・文化研究）

はじめに——「兵士」という文体

序章：「戦争体験」の社会学

第 1 章：「総力戦」と「戦争体験」

第 2 章：「敗戦」と「戦争体験」

第 3 章：「戦後」と「戦争体験」

終章：「戦争体験」の現在

まず、[はじめに]において、本書全体を貫くモチーフである、「戦争」と「書くこと」についての見取り図が提示されている。

ここにあるテーマは、「戦争」という巨大な技術の体系の表現と、「書くこと」という表現技術との結びつきの中で、それぞれその「本質」なるものの探究は極めて困難であるが、この二つが交錯する地点、「戦争」という技術の体系が、「書くこと」という技術の体系によって写し取られるその瞬間、あるいは「書くこと」という技術の体系が人々の経験を媒介に、「戦争」という技術の体系によって編制されるその瞬間を捉えようとすることによってのみ、我々はかろうじて「戦争体験」に関する想像力をめぐる何かしらの情況を描いてみせることができる (pp. 16)

ここで、本書において筆者がこだわる、「書くこと」についても確認しておかねばならない。それは決して文字通りのただの書写行為を指すわけではない。本書における「書くこと」とは、「個的な心情作用を中心としながら、社会的なるものへと開かれ、あるいは社会的なるものによって編成されるという、異なった水準にある実践の結節点」(pp. 26)とされている（その意味では、「書くこと」というよりはむしろ「言説行為」と言い換えられるのかもしれない）。そして、この「書くこと」による秩序のありようによる効果としての「文体」を描き出すことが、本書での当面の課題＝「情況を描く」ということになってくる。

ついで、序章 [「戦争体験」の社会学] においては、[はじめに]において見取り図が示された本書の問題構成を、特に歴史社会学の理論的な見地から再び把握し直すことで、本書の研究史上の意義を確定しておくことが目的とされている。そこでは、戦時動員論、戦争体験論、「戦争の記憶」論という戦争を語る社会学的把握について、それらの方法に内在して検討され、具体的にそれらの問題性が指摘されているのだが、中でも「戦争の記憶」論、さらにそれが依拠している「集合的記憶」論に対しては、多くの頁が割かれて検討されている。しかしながら、筆者はこの「戦争の記憶」論、及び「集合的記憶」論を手放す。

重要なのは、(中略) 集合的記憶に対して、それが・いま・ここにある、という前提を解体し、かつて・何が・いかにして書き込まれたのかということ、また、どのような媒介性によってどのような集積がなされたかを考察することであろう。すなわち「戦争の記憶」を「戦争体験」という位相に差し戻して拘ってみせること、現在あるようにみえる「戦争の記憶」の存在条件を「戦争体験」に遡って検討すること、これである (pp. 50-51)

さらにその分析対象である「戦争体験」の取扱い方＝論じる視点について筆者はこう述べる。

「戦争体験」をそれ自体できごととして捉える視点を考えてゆきたい。すなわち、「体験」そのものを掴み取ることができるなどは考えずに、分析者の分析的なまなざしも含めた社会的な諸力の中で「戦争体験」が現象として枠づけられていくさまを理解していくという視点である (pp. 56)

こうして、「戦争体験」を「兵士という文体」、換言すれば、戦争と「書くこと」の結びつきにおいて明らかにするという本書の方向性があらためて提示されるわけだが、そのための理論（あるいは分析枠組み）として、筆者は「言説分析」を選択している<sup>2)</sup>。「戦争体験」が極めて言語的に構成された現象であるということ、そして「体験」は、動員と復員の狭間にあるものとして、両者を接続させつつ分節して論じる必要があるものであるということの二点を鑑みて、この理論的選択はなされていると筆者は述べる。

さて、続く第1章〔総力戦〕と「戦争体験」においては、まず、「プレ総力戦」である日露戦争の「戦争体験」と、森鷗外をめぐるテキストが検討されている。そこで筆者は、鷗外が詩歌の形式を採って戦場で「書くこと」によって、傍観者にすぎない従軍記者・従軍作家である田山花袋の報告文においては決して成立しえない、“体験における「当事者性」の優越”を確保する様子を取り出してみせる。

しかしながらこうした「戦争体験」（と「書くこと」）は変容していく。ついで筆者が石原莞爾から取り出して見せるのは、軍隊の集合性を媒介する、あくまで軍内部において共有される「原体験」である「戦争体験」、そしてそれをめぐる言説としての「日露戦争の記憶」が、一九三〇年代の総力戦体制の中で、メディアに媒介されて大衆化・社会化されてしまうという様相である<sup>3)</sup>。さらにその後の総力戦下の軍事郵便において、「戦争の/による近代化」(＝「国家」の近代化)と、「書くことの/による近代化」(＝「内面」の近代化)という二つの近代化が「戦争体験」を焦点として完成されるという興味深い指摘がなされる。

次の第2章〔敗戦〕と「戦争体験」においては、まずはアジア太平洋戦争敗戦後の、復員兵、すなわち「兵士＝作家」たちによって担われた「戦争文学」（という言説の空間）が検討される。

兵士＝作家には、戦場で死んでいた、という可能性がつねに張り付いている。常に自分の生還に対するある疑いとともにその作者性は発効しており、戦場で彼らのすぐ横に転がった戦友の死体と容易に交換可能であったことは、言説のつながりのなかで自意識を現象させることとつながる。そうした自意識をめぐって、この文学が成立しているのである (pp. 134)

さらに、誰もが戦争体験者であった敗戦直後においては、自意識に相当な負担をかけ、さらに文学という形式を媒介として「戦争体験」は稀少化されねばならなかった。筆者が復員後の大岡昇平のテキストから明らかにするのは、このような、「戦争体験」を「書くこと」と、文学との諸相である。

つづいて筆者が原民喜から取り出してみせるのは、そうした「戦争文学」が、消失しながら「戦争体験」を社会的なものへと変換していく様相である。つまり、「書くこと」は、すでに自分の体験の特権性・互換不可能性を主張する戦争文学の作家だけのものではなく、ある社会的な広がりの中に配置されるようなものになる (pp. 177) のである。

そうして、第三章〔「戦後」と「戦争体験」〕で指摘されるのは、一九六〇年代以降、職業としての作家ではない「無数の」「無名の」書き手たちが制度化され、「戦争文学」という制度は、ここで「戦争体験記」へとみちを譲ることになるという状況である。同時にそれは、「書くこと」そのものよりもむしろ、それぞれのテキストを配列していく「編集」の作用が卓越してしまうという事態を招くという。

作者性の消去によって媒介性が透明化し、接続が容易になってテキストが無限に増殖してゆくという言説の状況が描かれてしまえば、書くことのおかれる位相ははっきりと変化せざるをえない。総力戦における体験の膨大とテキストの稀少を媒介していた「戦争文学」という装置はすでにゆるやかに消え去ってゆこうとしていて、その代わりに膨大なテキストと稀少な記憶のあいだで、むしろそれらをどう整序していくのかという「編集」こそが重要となる (pp. 185)

一九六〇年以降の大岡昇平のテキストの検討を通して筆者が明らかにするのは、この戦争と「書くこと」をめぐる決定的な変化である。

そうして「紙の中の戦争」が自明化し、匿名の無数の人々によって書かれる「戦争体験記」は、「編集工学」によって整理され、「戦争」という名の「一冊の書物」を作りあげていく。

さて、この章の第3節では、筆者も「あとがき」で認めているように、記述や方法意識の趣がガラリと変わり、筆者による長野県栄村でのフィールドワークを通した、「語りとしての「戦争体験」」、そして“エピソードとしての戦争体験の「現在」”が描き出されている。

そして、終章〔「戦争体験」の現在——「戦争体験記」と「戦争の記憶」〕では、本書全体の総括、そして今後の「戦争体験」研究への展望が示される。

以上が本書の大まかな内容である。続いて評価に移ろう。

### 評価と批判

やはり、何よりも評価すべき点としては、「戦争」あるいは「戦争体験」の研究に新たな地平を開いたということである。本書は、これまでの「戦争」研究・「戦争体験」研究が目/手を付けなかった（あるいは目/手を付けようにも付けられなかった）視角——つまり「書くこと」——から切り込み、ブレることなく、やり遂げている。「戦争体験」と「書くこと」の内的連関、および変容とそのメカニズムを丁寧に追いかけてみせ、決して、安易な説明変数——たとえば、政治、体制、資本などといった——を召喚したりはしない。こうした、本書と他の研究との差異は、例えば、本書と時期をほぼ同じくして出版された、福間良明『「反戦」のメディア史』（世界思想社、2006）と比較してみるとより際立つのかも知れない。

さらに、本書でなされている、「戦争体験」と「文学」の連関とその変遷の追尾や、「戦争体験記」は、「戦争」による国家の近代化と「文学（書くこと）」による内面/リテラシーの近代化の結びつきの産物であった（pp. 243）といった興味深い指摘は、社会学研究のみならず、日本近現代文学研究にとっても刺激的で、かつ重要なものであるはずである。（管見の範囲内では、「戦争体験」と「文学」についての、個別のテキスト論または作家論を越えた包括的な研究は、文学研究サイドからは意外なほど出てきていない）。

しかしながら、若干の批判もせねばならない。評者が最も違和感を覚えるのは、本書全体に流れる、ある種のアドホックさである。すなわち、「任意の作家（書き手）の、任意のテキストの分析を行ない、その固有性（あるいは代表性）に依って論じていく」という作法のことである。なぜ森鷗外、石原莞爾、大岡昇平、原民喜が、そして彼らの特定のテキストが選択されるのか。その理由は、やはり明示されなければならないだろう。さらには、このアドホックさは、ややもすると、所謂「テキスト（内容）分析」的な印象を招き寄せかねない。そうすると、本書の理論的選択として掲げてあるはずの「言説分析」との重大な齟齬をも露呈してきてしまうのではないか。

さらに、「日露戦争の〈集会的記憶〉」を修士論文のテーマとして研究を進めている評者——そのため、評者は研究領域や関心が本書と重なる部分が多く、また評者にとって本書は非常に重い先行研究であり、そうであるがゆえに、この書評は書かれている——が、自らの研究との関連で気になった点を指摘しておこう。

上でも見てきたように、筆者は、「戦争」という技術の体系が、「書くこと」という技術の体系によって写し取られるその瞬間、あるいは「書くこと」という技術の体系が人々の体験を媒介に、「戦争」という技術の体系によって編制されるその瞬間を捉えようとすることによってのみ、我々はかろうじて「戦争体験」に関する想像力をめぐる何かしらの状況を描いてみせることができる」（pp. 16 傍点評者）と、やや強い前提のもとで、論を展開していく。しかしながら、「戦争体験」が、「書くこと」あるいは「言説」——ここでは、やや狭い意味で用いる——のみならず、「モノ」——例えば、忠魂碑・記念碑や博物館の展示品といった——に配置/分配され、そこにある種の〈社会〉が立ち上がることも、また、ある。さらに、時として、そうした「モノ」（と〈社会〉）が、「戦争」あるいは「戦争体験」を饒舌に語りだすことも、やはりあるのではないか。例えば、日露戦争の「戦争体験」を、全国各地の村々のレベルにおいて担っていたのは、文学テキストや戦争体験記・従軍記といった「言説」というよりは、むしろ、忠魂碑・記念碑といった「モノ」と、そこに立ち上がってくる〈社会〉——わかりやすい例を挙げるならば、顕彰会や慰霊祭、記念講演会など——であった。これは、筆者が本書において、「戦争」と「書くこと」に拘り「言説分析」という方法によって描いて見せた“戦争体験”をめぐる「状況」とはまた異なる、場合によってはそれを相対化しかねない「状況」であるといえるだろう。そうした、いわば「戦争体験」の“モノ語り”（によって描き出し得る「状況」）を、筆者はどのように位置付け/意味付けるのであろうか。残念ながら本書では論じられていないのだが、非常に気になった点である。

## おわりに

ここまで見て来たように、本書の主たる守備範囲は、「戦争体験の一九〇〇年代～一九六〇年代まで」（森鷗外～大岡昇平まで）である。が、我々読者としては当然、それ以降、すなわち「戦争体験の一九七〇年代以降」も気になるところである。一九七〇年には、本稿の冒頭に掲げた『戦争を知らない子供たち』——その歌詞においては、（解釈の仕方は様々であろうが）「戦争体験」の欠落が堂々と宣言されている——がリリースされる。それでいて、最も長期にわたる「戦争体験」の持ち主である二人の旧日本兵——横井庄一氏と小野田寛郎氏——が発見されるのが、それぞれ一九七二年と一九七四年のことである。こうした社会状況を鑑みると、「戦争体験」の、さらには「戦争体験」観の、新たな転回/展開が、一九七〇年代に生じたのではないかと思われてくるのである。

だが、筆者はどうかや既に“本書以降”へのアプローチも始めているようである<sup>4)</sup>。本書を含め、この

筆者が生み出すもの、あるいは切り開いていく地平に今後も注目していくことにしよう。

### 注

- 1) このあたりの事情の、より包括的な議論については、成田 2005 を参照のこと。
- 2) なお、社会学理論としての「言説分析」(の現在)については、佐藤・友枝 2006 を参照のこと。また、「言説分析」と「近現代史」について筆者が論じた、野上 1997 も参照されたい。
- 3) この点に関しては、野上 2002 においてより詳細に論じられている。
- 4) 例えば、野上 2004, 2005 など。

### 参考文献一覧

- 小熊英二, 2002 年, 『〈民主〉と〈愛国〉』新曜社  
 川村湊ほか, 1999 年, 『戦争はどのように語られてきたか』朝日新聞社  
 佐藤俊樹・友枝敏雄編, 2006 年, 『社会学のアクチュアリティ 5 言説分析の可能性』東信堂  
 富山一郎, 1995 年, 『戦場の記憶』日本経済評論社  
 成田龍一, 2005 年, 「戦争像の系譜」『岩波講座アジア・太平洋戦争 1 なぜ、いまアジア・太平洋戦争か』岩波書店  
 野上元, 1997 年, 「言説としての「近現代史」」『東京大学社会情報研究所紀要』No. 54  
 ———, 2002 年, 「1930 年代と『戦争の記憶』——集合的記憶のメディア論的検討」吉見俊哉編著『一九三〇年代のメディアと身体』青弓社  
 ———, 2004 年, 「「おたく」という兵士——「戦争とメディア」論序説」『季刊 d/SIGN』No. 9  
 ———, 2005 年, 「あさま山荘事件と「戦争」の変容——「メディア論」の現代史のために」北田・野上・水溜編著『カルチュラル・ポリティクス 1960/1970』せりか書房  
 福間良明, 2006 年, 『「反戦」のメディア史』世界思想社  
 吉田裕, 1995 年, 『日本人の戦争観』岩波書店

※本書についての情報※ 野上元著『戦争体験の社会学——「兵士」という文体』(弘文堂・2006 年 2 月・定価: 本体 5,300 円+税・28 p)